

選択する自由、選択する責任 —大学教員になって感じたこと—

矢谷浩司 東京大学

【正会員】東京大学で修士号取得後、カナダトロント大学に渡り、博士号を取得。その後北京のマイクロソフト研究所にて勤務後、東京大学に教員として戻り、現在はインターフェースの研究と教育に携わる。

1. Ph.D. とは？

筆者は博士号をカナダのトロント大学で取得した。それまでは日本の大学に在籍したこともあり、日本

と海外の大学の違いや、留学することのメリット・デメリットを聞かれることが多い。そのような経験から、2014年に人工知能学会において筆者の経験



と考えをまとめたものを寄稿させていただいた^{☆1}。その寄稿では、博士号を取得することも大変はあるが、さらに考えなければならないのはその後の人生であることを述べた。

それからすでに大学教員として2年以上経過し、今回改めて博士号を取ることに関して執筆させていただく機会を頂戴した。今回は筆者の経験を元に大学教員になって感じた楽しいことと大変だと思うことを述べたい。これから博士号を取得する人のキャリアを考える一助になれば幸いである。

2. 選択する自由

大学教員としての筆者が感じる一番楽しいことはさまざまな自由があることである。特に自分でいろいろなことを選択することができる自由がある。筆者がありがたいと思う自由には3つある。

学生さんと一緒に多くの研究ができる

筆者が何よりありがたいと思っていることは、学生さんと一緒に研究がされることである。研究は1人でやるには限度がある。さまざまな研究の方向性を模索したいとき、いろいろな人がいることが重要になる。筆者の研究室は学生が正式に所属し始めて2年になるが、すでに15人以上の大学院生、学部生、およびサマーアイントーンを受け入れている。筆者の研究室では一人ひとりの学生さんが独立したプロジェクトを率いている。学生さんの数が急激に増えたため、研究室の運営に苦労することもあるが、それよりも一人ひとりが違うプロジェクトに携わっているおかげで、筆者も多くのことを勉強させてもらっている。

また今までやっていたりと思っていたがなかなかできなかった研究などに踏み出すこともできる。たとえば、修士の学生さんの一人はさまざまな楽器を演奏するのが得意で、深い知識を持っている人であった。そこで筆者も一度研究してみたかった楽器演奏に関する研究に取り組み始めた。このように才能ある若い学生さんと毎年会えることで、自分の

研究の選択できる幅も広がる。

さまざまな人と交流がある

大学教員になってからは以前よりもさまざまな人と交流する機会が増えた。特にIT企業や出版業界など、さまざまな仕事に携わっておられる方々と交流を持つ機会が増えた。それに応じて依頼される役割も増え、仕事も増えてしまうことがある。しかし、さまざまな現場にいる人や意見を持つ人と積極的に交流することは、新しい研究への刺激となる。

裁量が大きい

大学教員として自身の研究室を運営する立場になると、自分の裁量の大きさに気づかれる。自分の予算をどのように使い、どのプロジェクトをより積極的に進めるか、から、研究室のレイアウトやデザインをどうするか、といったことまで、自分で積極的に決めていかねばならない。最初のころは自分の城を築き上げるような楽しさがあり、他の職業ではなかなか味わえないものだと思う。

3. 選択する責任

日常的な業務や予算の獲得など、大学教員として大変だといわれていることはいろいろあるが、筆者が特に大変だと感じるのは、選択することの責任である。その中でも筆者が最も大変だと思う2つを述べる。

どのように学生を育てるか

研究室に学生さんを迎えるということは、その学生さんの人生の一部にかかわることである。20代前半という人生にとって重要な時期に、少なからず影響を持って立ち会うことになる。特に日本の大学の教員にとっては、研究室の大部分は学部生や修士課程の学生さんであることが多く、必ずしも皆が博士号取得を目指すわけではない。そのような中で、研究することの大変さや楽しさを知つてもらい、人生の次のステップにおいて役に立つ経験や知識を積んでもらうために、どのようなことができるかを考えなければならない。

どのように研究室を育てるか

人を育てるのと同様、研究室を運営する立場の人

☆1 矢谷浩司、「A Ph.D. – What does it take?」人工知能学会誌、第29巻4号、pp.395–399、2014年7月。

間として、研究室をどのように育てるのかを考えなくてはならない。研究室は人の出入りが非常に激しい組織である。主たる構成員である学生さんは多くの場合1～3年、長くても6年程度で研究室を出てしまう。つまり新しい人が入ってきて以前と同様の質の高い研究・教育活動ができるように、研究室の環境を整えなければならない。

4. Post-Ph.D.を考える

以上、短くはあるが大学教員としての筆者の今までの経験と感じたことを述べた。研究職と最も違うのは、研究に加えて教育という側面も考慮して仕事をしなければならないことがある。その点において、選択できる自由もある一方、選択する責任を常に忘れてはいけないと感じている。

○以前の寄稿においても書かせていただいたが、博

士号は取得することだけでなく、その後、どうしたいかが重要である。博士号を取得したからといって、短期的に給与が大幅に上がったり、社会的に高い立場に立てたりするわけではない。博士号を目指すときにはもう少し長期的な視点で自分の人生を考えておく必要がある。

筆者は新しい学生との最初のミーティングで、「卒業したら何をしたいのか?」という質問をいつもしている。すぐに答えを出せる人は少ない。だが、3ヶ月に1回程度キャリアの話をするようになっているうちに、「こういう仕事をやってみたい」や「この人のような生き方がいい」といったものが始めてくる。あるいは「この方向性は私ではない」というものかもしれないが、それも一つの選択ができたことになる。研究と同じく、人生の道はそう簡単に答えが出ない。だからこそ考え続ける必要がある。